

朗読の「間」に着目した非熟達者支援のための朗読上達過程の明確化

Pause-Centered Clarification of Improvement Process of Recitation Ability for Non-Experts

高島 佑典 (Yusuke Takashima) 指導：松居 辰則

1. はじめに

文芸作品などを音声を用いて主体的に表現することを朗読という。朗読には明確な方法論が存在しないが、聴き手は朗読に対して評価ともいえる印象を抱く。このとき、高い評価を得るためには滑舌や発声といった訓練方法が明確なスキル（マニュアルスキル）だけでなく、表現力といった暗黙知に依存するスキルも求められる。

本研究の目的は、朗読の上達の変化を観測可能な事象を用いて定義し、上達を支援するための方法を提案することである。観測可能な事象として本研究はイントネーションと「間」に着目した。また、朗読者を熟達者、研修者、初心者の3グループに分類し、分析を行った。

2. 実験1（非熟達朗読者を対象にしたスキル獲得の支援）

実験1では、支援を行うに際し、マニュアルスキルの有無がどのように影響するのか明らかにするために、研修者と初心者を対象に検証を行った。その結果、支援から一定の影響を受けるためには、ある程度マニュアルスキルが必要であるということが示唆された。しかしながら、これらの支援の結果得られた「変化」は、「上達」との弁別ができない。そのため、「上達」を定義する必要がある。

3. 実験2（熟達者と研修者の比較による「上達」の定義）

実験2では、熟達者と研修者の比較から「間」の時間長に着目して「上達」を定義することを試みた。なお、熟達者は朗読CDによる音声を採用した。分析した作品は島崎藤村著『家』や森鷗外著『高瀬舟』といった作品である。その結果、熟達者は「間」の時間長のバラつきが大きくなるように朗読をしていることが示唆されたが、これは一貫した特徴ではなく、「間」の時間長から「上達」を定義することはできなかった。しかしながら、分析のなかで、音声波形があるにも関わらず、音声を聴くと一瞬だけ無音に聴こえるという現象が観測された。本研究はこの現象を「見えない「間」」と呼称し、これについての考察を行った。

4. 見えない「間」の役割に関する考察

見えない「間」には、「間」の効果で単語を強調することを可能にしながらも、実際は無音でないため物語の流れを絶たないというメリットが存在する。このことから、見えない「間」を効果的に使えることが「上達」の指標になると推測し、本研究における「上達」として定義した。

5. 実験3（見えない「間」の回数変化に着目した朗読支援）

本実験は、朗読支援が研修者の見えない「間」を増加させられるか評価することを目的に行った。本実験における支援内容は、熟達者へのインタビューから得られた「物語の内容を自分の疑似体験に置換し、文章を自分の言葉として理解する」とした。図1は本実験の流れである。

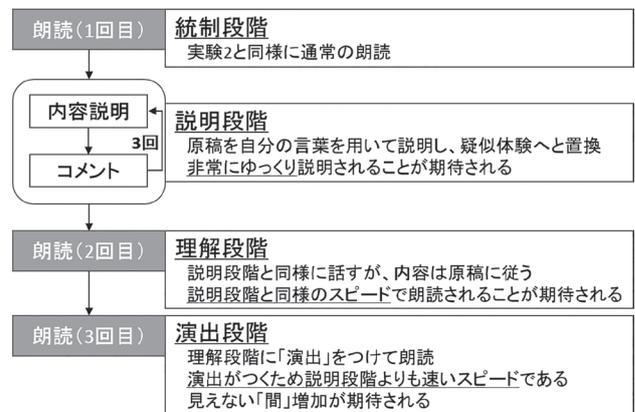


図1 実験3の手続き

支援の結果、表1のように「高瀬舟」では想定通りの結果を得ることができたが、「家」では理解段階で見えない「間」が増加した。これは、研修者が理解段階で速く読んでいたことから、既に演出段階の朗読を行っていたことが原因と推測される。しかし、疑似体験に置換した後、演出をつけて朗読を行えば、見えない「間」の発生回数は上がると解釈できるため、支援は有効であったと評価できる。

表1：実験3における見えない「間」発生回数

「高瀬舟」	統制段階	理解段階	演出段階
研修者A	0	0	1
研修者B	0	0	1
「家」	統制段階	理解段階	演出段階
研修者A	0	1	0
研修者B	2	3	3

6. おわりに

本研究は、朗読の上達の変化を観測可能な事象を用いて定義し、上達を支援するための方法を提案することを目的に行われた。その結果、観測可能な事象として見えない「間」を用いて上達を定義し、物語の内容を自分の疑似体験へと置換させることが上達のための支援となり得るとの知見が得られた。